

親子の似よりと自己受容について

— 女子学生における理想自己と現実自己のズレ —

秋 山 幹 男

Perceived Similarity of Daughter and Parents and
Relationship to Self Acceptance

— On female students' discrepancy between ideal self and real self —

Mikio AKIYAMA

はじめに

本学に赴任する前の私は8年間、シロネズミを被験体にして回避反応の消去実験という、臨床心理学の基礎的研究を進めていた。縁があって1972年に本学で教育と研究をさせていただくことになった。それは、私が28歳の年であった。幼児教育に関わることになった私の新しい研究テーマ探しが、この年から始まった。

1. 私の本学での研究テーマ探しについて

随分と何を研究するかで悩む日々が続いた。絵が好きだったから、まず幼児の絵の分析に取り組もうとしたが、これはうまくいかなかった。そんな時、河合隼雄氏の講演が母校で夜催された。彼が大事そうに取り出し映写してくれたのは、箱庭療法 (Sand Play Technique) で作られた児童の作品のスライドだった。これは、砂の入った箱の中に自分の好みの小玩具を置いて一つの世界を築き上げるという遊戯的な心理療法である。そこで早速、私も規格にそった砂箱を作り、ミニチュア玩具を購入して歩いた。

附属幼稚園児との遊びの一手段としてこのサンドプレイを活用し、沢山の幼児の作品が手元に集まった。ところがである。「これは何を作ったの」と尋ねても、園児達は部分的な玩具の説明はしてくれるものの、作品全体のテーマについては「わからん」がほとんどであった。ここでもう御手上的状態に追い込まれた。考えてみれば、サンドプレイはもともと治療のための一つの道具として使うものであり、長い長い治療経過のなかからその変化の意味を感じとっていく手法である。サンドプレイごっこで1人の幼児に1～3回位実施した程度で、その奥を極めるといった手軽なものではなかった。これも臨床の基礎的な研究として自分の研究手段にすることはできなかった。しかし、思わぬ拾いものはあった。子ども達と直に触れ合ったこれらの日々の積み重ねが、彼らと遊ぶための手段として大いに役に立ったのである。園児達にとって私は、秘密のおもちゃのお部屋のおじさんであり、次にはジャンケンおじさんという確固たる地位を与えてくれることになった。残念なことに、幼児のサンドプレイの研究は、まだ2編しか論文としてまとめ上げられていない。

意外な方面から私の研究テーマは顔をのぞかせた。1992年の論文⁵¹)に詳しく書いたのだが、私の人間を対象とした新しい研究は、女子学生の自己と父母の性格をみるために準備した調査研究で日の目を見たのである。ところが、この研究も試行錯誤の連続で、これもまたいろいろな苦勞をしたものである。とにかく『親子の似より』という概念一つを掘り起こすのに、何と16年の歳月を要してしまった。同じ性格項目を用いて、女子学生に「自分自身」と「母親」・「父親」について評定してもらう。そしてこれを三者別々にみていくのではなく、三者の結果を横一列に並べ、どの位の項目が3人の間で一致しているかを拾い出していくのである。1981年の論文⁵²)で、この方法を七区分表示法と命名した。この親子の似よりに関する研究は、本論文を含めて今のところ7つ仕上がっている。もう一つ嬉しい事は、21年前にネズミの実験で考え続けていたものが、人間のパーソナリティ研究でも理念として十分通用しうることが分かったことである。1993年は、これから先20年間の新しい研究へ向けての道が開かれたという実感を持って始まった。

この親子の似よりの研究と並行させながら、各種の検査・調査も精力的に試み続けている。そのうちの1つが、今回紹介する、理想自己と現実自己の差異(ズレ)をもとにした「自己受容性」の研究である。この調査は、本学に赴任して少し時間がたった頃より、青年心理学の授業の時に実施し始めたものである。このやり方は、学生時代の1967年頃、小林利宣先生より伝授されたものである。“ズレの大きい人はノイローゼの状態にあることがよくある”といったようなコメントを、先生が当時なされたように記憶している。理想自己と現実自己を調べるために使われる49の形容詞対が長島ら(1967)⁵³)

のSelf-differential法であることを知ったのは、随分後の1980年代に入ってからのことである。『先に調査ありき』で、この研究の意味していることは何であるのかについては、ほとんど理解できないままに、「現実自己と理想自己との間にズレの大きい人もあれば、少ない人もいる」程度の解釈のみで、しばらくの間過ごしていた。

文献収集の仕方について、焦っていた私は、1984年の夏休みから腰を落ちつけて、附属図書館通いを始めた。1980年以降の日本の学会誌や、全国の大学の紀要に執筆されている論文を調べ、カードに転記していくという誠に単調な作業である。また、図書館のK先生に依頼して、自分なりに見つけ出したキー・ワードをもとにDIALOGを使って、欧文文献のリスト作りも1987年より開始させることができた。そしてその同じ年に、第1回目の邦文の文献収集をした。収集した論文を整理しながら目通しをしていくうちに理想自己と現実自己のズレを用いた研究が何を確かめようとしているものなのかが見えてきた。すなわち、その心理学用語は、「自己受容(Self-acceptance)」だったのである。

2. 私の生活体験について

私は、第二次世界大戦中の1943年(昭和18年)に誕生した。幼い頃の記憶はほとんどないといってもよいが、ひもじい思いをしていた事だけは体に染み込んでいる。私の幼児期の時代は、敗戦後で食べるのがなかなかできなかった時代であった。今から考えると、私達の親はよくもまあ2人の男の子を育て上げてくれたものだと感謝できる。しかし、そのように思えるようになった時には、すでに親は2人共この世を去ってしまっていた。実際がそうであったというよ

りは、私が抱いた両親のイメージについて語ってみよう。

「厳父慈母」という言葉がまだ世間で通用していた1940年代から1950年代にかけて、私は私の両親を「慈父厳母」と捉えていた。家計の遣り繰りをする母の溜息は私の心を苦しめ、父の無念さをヒシヒシと感じるとる敏感な子どもであった。私は、いつの頃からか、父の方に加担し、母と対立する関係を作り上げていた。今考え直してみると、気丈夫な母がいたから父も仕事を何とか遣り遂げられたのであり、世間からも大切にされる人間になれたのだと思う。しかし、母から絶えず他人と比較され、欠点を指摘し続けられたことによる私の苦しみは、母に言わせれば、「私ができるように言ってきたからこそ、お前も人並みに何とかなれたのだ」ということになる。母の考え方・やり方は、確かにある面では正しいものではあったのだろう。だが、多情多感だった私にとっては、ロマンチストな父親の甘さも、現実主義的な母の厳しさも共に、私の許容範囲をはるかに越えていた様に思うのである。

5・6歳の頃は、朝鮮戦争が起こりそうな気配になってきた時期である。そんな幼い私が死ぬことに恐れを懐いていた。「僕って一体何者なのだろう」の萌芽期である。爆弾が落ちてくれば、あっけなく自分は死んでしまうだろう。その時、僕は一体どうなるのだろう。自然と涙がでてきた。私が最初にこのように思い悩んだ場所は、日溜まりの縁側のそばだったという映像的記憶がある。

小学校に入学してから、私は先生を尊敬するようになった。先生がとても偉い存在に見えた。低学年時代には、女の先生は決してトイレなどといった所には行かないものだと、一人勝手に思い込んでいた。私は、両親では満たされな

かった部分を、先生方に求めていた様に思う。中学3年の頃、教頭先生で英語も教えて下さったE先生が、私達生徒を20名位集めて雑談をしているうちに、「君達の将来を占ってあげよう」ということになった。他人のことはまったく覚えていないが、私の番の事だけはしっかりと覚えている。先生は一言私に対し、「校長先生だな」と言われた。ビックリした。だが、その時はただそれだけで終わった。

高校では、初めてでしかも最後という、たった一度だけの実践がわが母校で成された。つまり、1人の先生が3年間続けてクラスを持ち上がるという担任制度がそれである。私の担任は、生物学が専門のI先生であった。先生は3年間ほとんど休むことなく毎日、朝のショート・ホームルームで短い話をして下さった。私は聞き惚れていた。クラブ活動は、もちろん先生が顧問の生物部に所属する。クラブの部長として、あっちこっち植生調査をしに出かけたものである。もう私は、I先生そのものといってもよい程心酔しきっていた。大学生になったある日、先生のお宅を訪問した折のことが思い出される。それは、自分の考えていることについて話したら、先生が、「僕の言ったことがよく染み込んでいるね」と言われたのである。自分は一生懸命自分の考えた事を話したのに、“何のことはない。私が考えて話す内容は、ほとんど先生から教えて戴いた借り物なのか”といったほろ苦い気持ちになっていた。今の自分は、この事は当たり前前の事だと素直に思えるようになってきている。いろいろな人と話を交わし、沢山の本を読んできたからこそ、自分なりに自分の考えとして話ができるのである。人の借り物にちよっぴり自分の人生経験を絡ませながら誰もが話しているのであって、自分一人で考えたものなどほんのわずかしかないと分かってきたし、うろたえる

こともなくなっている。

大学生時代には、家庭教師として随分沢山の家庭に入るという、普通ではなかなか得難い体験もした。教え子のご両親とも親しく付き合わせていただき、社会の先輩としての話もいろいろ聞かせてもらった。私の心のなかに、理想の父親像・母親像が次第に姿をみせるようになりだした。そして28歳で無事結婚。妻の両親との新しい付き合いが始まる。

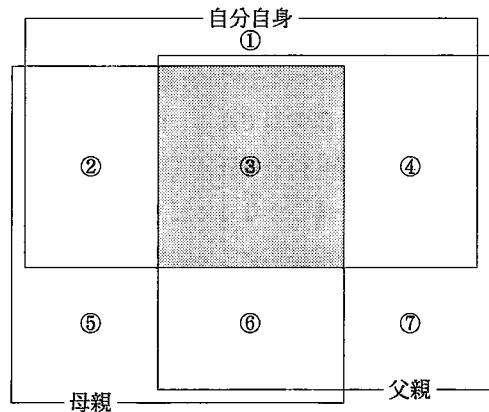
この両親は、まさに厳父慈母型の親であった。そして何よりも人を、人間関係を大事に考える二人であった。岳父は、「一言って十を知れとまでは言わない。しかし、一言われて二か三位のことが分からない者は駄目だ」という信念をもっておられた。何でも自分で考え、そして自分なりに遣り遂げるように励まし、助言指導をして下さった。一方、母の方は、懐の深い温かい人柄の方である。私が精神的に苦しみ悩んでいる時、心身共にリラックスできる心の空間をさりげなく準備して下さるのである。私の心のなかに形成されてきた父親像と妻の母親としての子への接し方が、何度もつまづきかけながらではあったが、私達に私達なりの家庭を築き上げさせ満21年を迎えようとしている。十数年前に妻に実施した似より度は、何と80%以上の項目が一致するというものであった。こんなデータは、その後学生達に調査を実施してきたが、めったにお目にかかれない。今の基準でいえば、特大の似より「大」群の人である。

50歳に近づくにつれて、一人ひとりには確かに別個の存在であるが、やはり法則定立的な把握・研究は大切なものであると再び思えるようになった。本当に個が見えてきたところから、全体のことでもまた見えるようになり始めたと言い換えてもよい。この考え方の変化が、親子の「似より」という私なりの物差し(尺度)を作り上げ

ることになったのだし、「自己受容」ということばも身近なものとして理解できるようにさせてくれたと思う。また、素直な気持ちで『自分は生かされている』と言えるこの頃である。これまでコツコツと基礎的研究を積み上げてきたが、これから先の人生では恩返しの意味も込めて、教育実践とか臨床活動にも自分の目を向けさせたいと考えている。ささやかな恩返しにしなければならないとは思っているのだが、そういう事を考えられる年令に自分も差し掛かってきたことを有難いことだと感謝できるようになった。

3. 親子の「似より」について

1992年の紀要論文⁵⁾をもとにして、この親子の似よりについて若干の説明をしてみよう。「自分自身」・「母親」・「父親」について、56コの性格項目で評定してもらうことはすでに述べた通りである。これを横一列に並べて比較してみると、自分自身についての性格項目(はいかいいえで判断されたもの)は、自分のみ・母子共通・三者共通・父子共通の4つの区分の中



(単位：区分③に入る個数)

図1 7区分表示法を用いた親子の「似より」の群分け
(秋山, 1981²⁾、1992⁵⁾より)

にすべて納まる。母親の場合も同じで、母親のみ・母子共通・三者共通・父母共通の中に、父親では、父親のみ・三者共通・父子共通・父母共通の中のいずれかに入る。これを一つの図にまとめてみると、図1のような7区分表示ができるのである。この区分のうちでも特に三者共通区分(③)に注目し、ここに納まった「はい」と「いいえ」で回答のあった項目の数を基準にして、似より「大」群(上位約25%)・似より「中」群(約50%)・似より「小」群(下位約25%)の3群を抽出していくのである。

次に、「大」群と「小」群のこれまでに得られた特徴を取り上げてみよう。似より「大」群の女子学生達は、他の2群の者と比べて自分のことを「あまり内向的ではなく、自己主張する程度もさほど強くはない」とみており、さらに、自分は誠実であり、明るい性格であると認知している。この似より「大」群の性格について、MPI性格検査とY-G性格検査を同時に実施し、結果について確かめてみた。前検査では、外向的であり、神経症的傾向も低い。後の検査からも結果を裏付けるように、情緒的に安定感をもち、社会的適応も自分はよいと受け止めていた。これに対し、似より「小」群の人達は、MPIでは内向的で神経症的傾向は高いと自分を見ているものが多いという結果となり、Y-Gでも不安定消極型(Eタイプ)に近い者が2割近く含まれていた。自分が両親と性格的によく似ている(たとえ意識をしていないとしても)と認知した学生達は、何とも明朗な存在であることがクローズアップされた。(もちろん、群内の一人ひとりを見ていけば、「小」群の人のような結果になる学生も若干は含まれている。)

4. 自己受容 (Self-acceptance) について

臨床家であるRogersら(1954)は、“不適応な行動をする人(心理的障害者)が己を客体視して認知した場合に、現実自己像と理想自己像の間のズレで大きな差をみせる”ことに気付いた(山本, 1988²⁹⁾より)。これに基づき、実証的研究を積むなかで彼らは、このズレが不適応の指標となりうることを証明していったのである。中村・板津(1988)の文献研究⁶⁾によると、Rogersらは1939年の著書の中で、「自己受容」ということばを取り上げており、自己受容することによってパーソナリティが成長し、何らかの変化が生じるであろうということに言及しているとのことである。

4-1. 自己受容とは(定義)

伊藤(1992)⁹⁾によると、臨床的には、「自己受容は、評価なしにありのままの自己を受け入れること」とされており、実証的な研究では自己評価・自己満足または自尊感情とほぼ同じ意味として、操作的に定義されたものが多くみられるようである。さらに彼女は、Rogers(1942)のカウンセリング理論では、「自己受容を、ありのままの自己を好きになること」という定義がなされ、この自己受容はセラピーの終極目標とされていると指摘している。しかし、中村ら(1988)⁶⁾は、心理療法における自己受容の意味で共通しているものを、“自己受容することによって、自己認知の変化や現実世界の受容が生じるようになる。さらに、自己認知変化などが、クライアントの持っている問題を解消していくであろう(P.148より)”とまとめた上で、心理療法における自己受容の位置は、Therapeutic-Goalというよりも、一時的なパーソナリティ変化・パーソナリティ成長の始まりだと言える

と述べている。筆者には、中村らの考えの方が実感としてよく分かる気がする。

これからは、自己受容の定義の一部を中村らのまとめ¹⁶⁾から取り出し紹介してみよう。

国分(1979)は、自己受容と是認を区別し、「自己受容は、あるがままに自分を許すことである。自分をとがめないことである。自分で自分を労ることである」と定義し、是認とは、善悪判断があり、知性とするもの。これに対し、受容は、不思善悪、感情とするものだと捉えている。

梶田(1980)は、「自己受容は、自分自身に関してどの程度まで正確で完全な認識を持っているかの程度である」とし、自己受容が自己成長的な意欲や態度の基盤になると述べている。

このことを水島(1969、1971)の言葉で表現すれば、「自己受容とは、単なる自己充足機能ではない。現状を“これでいいのだ”として発展を停滞させてしまうのではなく、主体的に未来へと立ち向かう姿勢・生きる姿勢として捉えていくべきである」となる。

この3人に代表されるような研究者の大まかな共通点を、中村らは現象学的心理学といわれる立場の考え方であると位置づけ、次のようにまとめている。

1. 自己受容は、ありのままの自己を抑圧・歪曲なしに受け入れること。
2. 操作的には、「現実自己」と「理想自己」の一致度であらわされる。

一方、精神分析的な立場からの自己受容の定義もまとめられているが、2・3紹介しよう。

Block, Jら(1955):「自己受容は自己統制構造機能である。」

小此木(1978):「自我の防衛の解決」

国分・国分(1984):「自己受容できないこと

は、超自我が強すぎるのだ。」

木下(1983):「自己受容感は、エリクソンの有能感に対応するものであろう。」

4-2. 「自己受容している人」とはどんな人なのか

やはり中村ら(1988)¹⁶⁾の紹介によるのだが、諸研究の結果を大まかに整理し、次のようにまとめている。

「自己受容している人は豊かな自己理解、自己の内面的な安定性、適度な自信を持ち、他者を尊重し、円滑な対人関係をとることができるなどの特徴がある(P.135~6より)。」

また、自己受容性とパーソナリティ特性についての関連からは、自己受容している人の特徴として、防衛的態度が弱いこと、自分自身に自信があり、無力感を感じないこと、社会的接触を求め、社会的規範を守るなどといったことが取り上げられていた(P.145より)。

新しいところでは、Locus of Controlとの関係についても触れてあった。自己の能力や努力を強調する傾向の人は、運やチャンスを強調する傾向の人よりも、自分自身を肯定的に受容している。また、自分自身を信頼できるということが、行動の規範を自分自身に置くことに作用しているというようにまとめられている(P.146より)。

4-3. 日本独特の心理療法について

対人恐怖・赤面恐怖といったようなノイローゼの治療に森田療法がある。池見(1968)¹⁷⁾はとられからの解放の章で、次のように記している。“症状のなりたちを聞かされると、「気」にかけ注意を集中するためにうまれる症状だから、これを治すためには、気をかけないように、注意しないようにしましょう」とする人が多いが、こ

これは逆効果である。注意しないように努めることが、いっそう注意を強めることになるからである。このようなまちがった努力をやめて、むしろ、気になればなるまま、あるがままにまかせて、日常生活に必要な作業、とくに手足を動かし、自然に親しめるような作業に打ちこんでゆくという、生活態度を実践することによって、精神交互作用や「悪知」をうちやぶってゆくというのが、森田療法の原理である（P. 203～4より）。”この治療法は、森田正馬医師自身が若い頃強度のノイローゼにかかり、座禅に救いを求め、回復していったその体験から編み出した彼独自の精神療法なのである¹⁹⁾。中村らもこの人のことに触れている。“森田のいう「あるがまま」を英訳すれば、それは「Self-acceptance」になる（沢崎）。”文学部生を対象にした青年心理学の講義で、毎年話題にする人物の一人がこの森田正馬氏である。

今一つ、直ちに頭に浮かぶものは、内観療法である。これも、吉本伊信氏によって「自己を知る」方法として工夫された日本的な治療法である。古くから行われてきていた、浄土真宗の一派に伝わる「身調べ」という求道法の応用である。“内観とは、自己の内に沈潜して、過去から現在に至るまでの対人関係の中で、自分がどのようなあり方をしていたかを、「して貰ったこと」「して返したこと」「迷惑かけたこと」という観点から具体的に観照していく。母親に対して、父親に対して、きょうだいに対してと、徹底的に自己凝視をしていくのである（三木、1976²⁰⁾ P. i～iiiより）。”この一事に専念集中し、指導者と2時間ごとに問答を交わす中から、自己について目が開け、自分の本当の生き方が見え始めてくるというものである。怖いけれども一度はこのタイムトンネルを潜ってみることによって、澱んでいた自己や、自己をとりまく

人々との関係が、いつもと同じ事であるにもかかわらず、新しい光の中に鮮やかに甦ってくるのである。これも立派な自己受容の姿であろう。

4-4. 自己概念 (Self-concept) について

1940年以降、行動の内的準拠枠であると考えられる自己概念 (self-concept) に関する研究が実に多くなされるようになったが、その使われ方には統一がなく、自己意識・自己評価・自己受容性などと類同的に扱われることが多かったと、山本 (1985)¹⁶⁾ は述べている。そこでまずは、彼がまとめている自己概念の定義を3人の研究者の考え方で説明してみよう。

Turner, R. H. (1968): 「持続的同一性のある、自分の本性についての知覚的自己イメージ」

Shavelson, R. J.ら (1976): 「自己概念とは、自分の日常的な行動属性や、有意な他者との交渉や環境との体験などから推論され、総合判断された結果のgeneralな知覚的自己」

梶田 (1980): 「そのときどきで変わるいろいろな自己意識から抽象された、比較的持続的同一性のある自分の姿」

自己概念を自己受容との関連で述べてみると (中村ら¹⁰⁾)、 「自己概念とは、その人自身のパーソナリティの全体的・包括的な評価である (Bruno, F. J., 1986)」ということになり、このように定義づけると、“自己概念の質的分析視座は、自己受容の問題となる (McCandless, B. R., 1970)。”村田 (1984)¹⁴⁾ によれば “自己概念を適応の指標として用いるのは、Billesら (1951) のごとく、現実自己と理想自己との差異を測定するものが大勢を占めており、現実自己と理想自己の不一致度 (discrepancy) と適

応度との間には、一義的な直線的関係があると考えられている”ようである。

本研究で現実自己と理想自己のズレを調べるために用いる、6因子よりなる49コの形容詞対は、長島ら(1967)¹⁵⁾のものであったことは前に述べた。彼らは、「自我」を現象学的自己(phenomenal self)ないし自己概念(self concept)の意味に限り使用している。“現象学的観点からすれば、ある個人が自分自身をどのように価値づけ、どのように見ているかなどという自己概念の内容は、その個人の行動および適応と密接な関係をもっている。”として、自己概念を操作的・客観的にとらえる用具としてSelf-differential法を開発したのである。この修飾語対(形容詞対、形容動詞対)からなる自己概念測定の尺度は、今日広く研究に使われている(例えば、村田ら¹⁶⁾、伊藤⁹⁾、山本¹⁰⁾など)。

5. 本研究の目的について

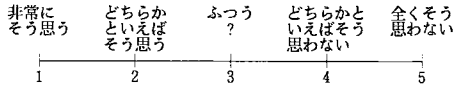
長長と記してきたが、このような私の個人史、第Ⅱ期の研究史を通して、本研究がまとめられたのである。この研究の狙いは、女子学生の認知している親子の似よりを、七区分表示法を用いて3群に分け、その各々の人達が、「現実自己」と「理想自己」のズレで測られている「自己受容性」と、どのように関わっているのかを調べることにある。具体的に述べると現実自己と理想自己のズレを差異得点(D-score)化し、これを“大きな差あり”・“やや差あり”・“差は小さい”の3つの区分に分ける。この3つの区分が、似より「大」群・「中」群・「小」群という3群間でどのような相違をみせるか検討していくのである。

方 法

対象者と実施期日 広島文教女子大学文学部(国文学科・英文学科・初等教育学科)2・3年生。親子の似よりの調査と、「現実自己」と「理想自己」の調査は、2週間の間隔をおいて実施された。実施年月は、1980年7月、1982年6月、1984年6月、1985年6～7月そして1987年7月である。計230名の者が本研究の対象となった。なお、1980年7月のものは全体のD-scoreと6因子のズレ(Σd^2)の資料しか残っておらず、49項目の1つひとつがどのように評定されていたかを確認するための原データが行方不明となっていた。他の4回実施のものは、すべての原データが揃っている。

実施方法 青年心理学の授業中に学生に配布し、時間内に評定してもらい、提出してもらった。学生への情報提供のために、各自ペンネームを準備してもらっている。後日計算をし、まとめ上げたものを一覧表にして全員に手渡し、簡単な説明を加えるためである。その際の筆者の基本的な姿勢は、“自分の結果をまず探し出して(ペンネームなので自分だけしかわからない)、全体の中に位置づけながら自分なりに考えてみる”ことである。「自分とよく似たような判断をする人は、あなたのまわりにも沢山いることにまずは一安心し、次に、こんなふうになりたいと思う自分の未来の姿を探し出し、それに向けての第一歩を踏み出してごらん」というコメントをよくする。

実施内容 ①親子の「似より」の調査について 西平が作成した75項目の性格項目を1985年の論文で56項目に減らし、これを因子分析にかけた。その結果は、4つの因子の中に42項目が入り、残りの14項目のうち、2つは2つの因子に重複負荷していたが、あとの12項目は低い負



F 1 内向性(12)

- しょげやすい
- おく病な
- 感傷的(オセンチ)な
- 意志の弱い
- 甘え(た)
- ロマンチックな
- 行動力のある(-)
- 他人を気にする
- 指導力のある(-)
- スケールの大きな(-)
- 内気な(はにかみやの)
- 服従的な

F 3 誠実性(14)

- 礼儀正しい
- ねばり強い
- 几帳面な
- ひたむきな
- ものを深く考える
- 包容力のある
- 正義感の強い
- 献身的な
- 親切な
- やさしい
- なげやりなところのある(-)
- 無責任な(-)
- あきっぱい(-)
- 調和のとれた

F 2 自己顕示性(9)

- 利己的・自己中心的な
- 支配欲の強い
- 強がり(の態度をとる)
- うぬぼれの強い
- わがままな
- ひねくれた
- 頑固な
- 虚栄心の強い
- 粗暴な

F 4 明朗性(7)

- 明るい
- ユーモアのある
- 友人の多い(社交的な)
- さっぱりした
- 冒険好きな
- 未来に大きな希望をもつ
- 孤独な(-)

その他(14)

- しつと深い
- 不安定な
- 神経質な(線の細い)
- 疑い深い(不信の)
- 理想主義的な
- ヒステリックな
- 趣味の広い
- (毎日の生活に)生き甲斐を感ずる
- 素直な
- ニヒルな(未来に希望や理想のない)
- 体の強い(たくましい)
- 独立心の強い
- 宗教的な(敬けんな)
- 古いものの考え方をする

え」とし、「はい」「?」「いいえ」の3段階に置きかえる。その後、この「はい」と「いいえ」の項目をもとにして、群分けの処理をしていく(図1参照のこと)。

② 長島ら(1967)¹⁰⁾のSelf-differential Form Aについて これは、向性因子・強じん性因子・誠実性因子・情緒安定性因子・過敏性因子・理知性因子という6つの因子で構成されている、49コの形容詞対である。この自己概念測定尺度を用い、まずは、現実自己の場合について7段階で評定してもら(左半分に印刷)。ついで、理想の自己(こうなりたいと思う自己)の場合について、同じ作業をくり返してもら(右半分に印刷)。記入がすべて終了した次の作業は、各形容詞対ごとに、左の現実自己の評定と右の理想自己につけた評定の差をとる(d)。例えば、左が5に○がつけてあり、右では2に○がつけてあった場合、その差はd=3となる。これを二乗して方向性をなくし、49コの形容詞対Σd²

荷量であった。そこで、この14項目はその他としてまとめた。4因子とその他でまとめた項目の内容は、上記の通りである。

評定の対象は、「自分自身」・「母親(自分の)」・「父親(自分の)」の三者についてである。各評定対象ごとに、上記の56の性格項目を用いて、5件法でチェックしてもらった。

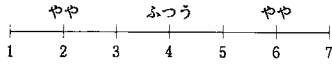
データの処理 親子の似より調査で得られたデータは、群分けのために、「非常にそう思う」と「どちらかといえばそう思う」をまとめて「はい」とする。「どちらかといえばそう思わない」と「全くそう思わない」をあわせて「いい

を算出する。しかし、このままでは値が、最低0から最大1764と大きく拡がりすぎるので次の式で変換し直して、差異得点(D-score)を求めることにする。こうすれば、範囲は0から6の間に納まるのである。

$$D = \sqrt{\frac{\sum_{i=1}^{49} d_i^2}{49}}$$

di=現実自己と理想自己の各スケール間の差
49=形容詞対の数

従来の研究の差異の算出方法は、このように6因子49コの形容詞対全部を込みにして、全体



向性因子(9)

- 外向的な……………内向的な
- おしゃべりな……………無口な
- にぎやかな……………静かな
- 外面的な……………内面的な
- 陽気な……………陰気な
- 社交的な……………孤独な
- 開放的な……………閉鎖的な
- 派手な……………地味な
- でしゃばりな……………ひかえ目な

強じん性因子(10)

- 臆病な……………勇敢な
- 弱々しい……………たくましい
- 無気力な……………意欲的な
- 弱気な……………強気な
- 消極的な……………積極的な
- 頼りない……………頼もしい
- 小心な……………大たんな
- 弱い……………強い
- 個性のない……………個性的な
- 無能な……………有能な

理知性因子(5)

- 理性的な……………感情的な
- 冷静な……………情熱的な
- 理知的な……………感覚的な
- しん重な……………軽そつな
- おとなっぽい……………子供っぽい

誠実性因子(11)

- 誠実な……………不誠実な
- まじめな……………ふまじめな
- 清潔な……………不潔な
- きちんとした……………だらしない
- 注意深い……………不注意な
- 勤勉な……………なまけた
- 正確な……………不正確な
- 物覚えのよい……………忘れっぽい
- 責任感のある……………無責任な
- しん重な……………軽そつな
- 敏感な……………鈍感な

情緒安定性因子(10)

- 丸い……………角のある
- あたたかい……………冷たい
- 思いやりのある……………自分勝手な
- 親切な……………いじわるな
- 気長な……………短気な
- すなおな……………強情な
- 優しい……………きびしい
- 気持よい……………気持悪い
- やわらかい……………かたい
- おだやかな……………はげしい

過敏性因子(4)

- 病弱な……………元気な
- 不安定な……………安定した
- 敏感な……………鈍感な
- うたがいがやすい……………信じやすい

6因子ごとにその因子を構成している形容詞対の評定値を加算し、その項目数で割って平均素点を求め、現実自己の場合と理想自己の場合では、どの方向にどれだけずれるかを調べたのである。似より「大」群と「小」群の学生達が、自分をどの程度に好ましいとみているのか（現実の自己）、また、理想の自己ではそれがどれ位どの方向にずれていくのかをみることを狙っている。

結果と考察

1. 親子の「似より」による3群の抽出について

図1で示した7区分のうち、三者共通区分(③)にはいった「はい」と「いいえ」の出現数をもとにし、群分けを行った。似より「大」群・「中」群・「小」群の抽出の仕方、該当人数については、すでに述べた通りである（はじめに3. 親子の「似より」についてを参照のこと）。

こと）。

表1は、3群の三者共通区分(③)にはいった性格項目の数と群の人数がのせてある。「大」群・「小」群とも大体25%の出現率に納めよう

表1 3群の三者共通区分(③)にはいった性格項目*1の数と人数

群	三者共通区分(③) 単位コ	N	出現%
似より「大」	35 - 19	64	27.8
似より「中」	18 - 8	108	47.0
似より「小」	7 - 0	58	25.2
計		230	100.0

*1 「はい」か「いいえ」で選択された項目数

の差異得点(D-score)を出し、これを適応の指標として用いている。本研究では、さらに詳しく内容を検討するために、6つの因子ごとの差異得点を、同じ算出法を使って取り出してみた。式は同じものでよいのだが、向性因子の場合を例にして説明すると、nが9コに変わるし、 Σd^2 は9つの形容詞対のスケール間の差を二乗し、それを合計したものとなる。他の5つの因子についても、同じやり方でD-scoreを出していく。もう一つ欲ばって、素点も分析に使うことにした。この場合には、チェックされた方向性をみることができる。3群の学生達が現実自己と理想自己についてどのような評定をしたのかを確かめようと考えたのである。そこで、

表2 7区分ごとにみた項目の平均出現数と3つの評定対象の平均出現項目数

(単位 コ)

区分	7区分ごとの出現数 (コ)							「はい」か「いいえ」で 選択された平均項目数		
	① 自分 のみ	② 母子 共通	③ 三者 共通	④ 父子 共通	⑤ 母親 のみ	⑥ 父母 共通	⑦ 父親 のみ	自分自身	母親	父親
似より「大」 M (SD)	9.0 (4.1)	6.8 (3.6)	24.2 (4.8)	6.8 (4.7)	8.2 (4.4)	9.7 (4.7)	7.9 (3.7)	47.0 (6.1)	49.0 (5.3)	48.7 (6.3)
似より「中」 M (SD)	12.8 (5.4)	7.1 (4.2)	12.1 (3.0)	8.1 (5.3)	11.3 (5.2)	10.2 (5.5)	10.3 (5.1)	40.2 (7.3)	40.8 (7.2)	40.7 (7.9)
似より「小」 M (SD)	15.0 (5.0)	7.3 (4.8)	4.5 (2.2)	7.3 (4.3)	14.4 (6.6)	8.2 (5.2)	12.1 (6.2)	34.6 (7.3)	34.3 (9.7)	32.1 (10.4)
全 体 M (SD)	12.3 (5.5)	7.1 (4.2)	13.6 (8.1)	7.6 (5.0)	11.2 (5.8)	9.5 (5.3)	10.1 (5.3)	40.7 (8.3)	41.5 (9.2)	40.8 (10.2)

としたが、そううまくはいかなかった。表2は、7区分(①~⑦)における平均出現数とSD、加えて「はい」と「いいえ」で選択された平均項目数とSDが、3評定対象ごとに示されている。なお、区分③のところに網点をつけたのは、ここで似よりによる群分け作業が行われるからである。1992年の論文⁹⁾と同じく、自分のみ区分(①)・母親のみ区分(⑤)それに父親のみ区分(⑦)は、三者共通区分(③)の出現の仕方とはまったく逆で、「大」群よりは「中」群、「中」群よりは「小」群となるにつれて、項目の出現数が増大し

ている。三者共通区分に入る項目が少なくなるということは、すなわち、残りの選択された項目が、この区分の中へ散らばっていくことを意味している。

親子の似よりによって群分けを始

める前は、専ら認知タイプを求めて群をつくるやり方をしていた²⁾。今後は、似より「小」群にはいった学生の様子をもっと詳細に分析検討してみたい(例えば、母子接近型・父子接近型・父母接近型・個性型)。

2. 親子の似よりによって抽出された3群と「現実自己」と「理想自己」のズレとの関係について

1980年から'87年までの5回の現実自己と理想自己についての調査では、230人のデータを

表3 3つの似より群と3つのズレ区分との関係

(単位 人・率)

群	似より「大」		似より「中」		似より「小」		全 体	
	n	%	n	%	n	%	N	%
現実自己と理想自己のD-score (差異得点)								
大きな差あり (4.34-2.50)	7	(10.9)	21	(19.4)	20	(34.5)	48	(20.9)
やや差あり (2.49-1.50)	34	(53.1)	68	(63.0)	26	(44.8)	128	(55.7)
差は小さい (1.49-0.82)	23	(35.9)	19	(17.6)	12	(20.7)	54	(23.5)
計	64	(99.9)	108	(100.0)	58	(100.0)	230	(100.1)

集めることができた。その全員の差異得点をみると、最もズレの小さかった者は0.82、最も大きなズレをみせた人で4.34であった。これを次のような3つの区分に分けてみた。“差は小さい”は0.82～1.49の範囲に入ったもの、“やや差あり”を1.50～2.49までとし、“大きな差あり”を2.50～4.34としたのがそれである。本研究でも操作的に、自己受容度をズレで捉えてみることにした。先人の研究を参考にすれば、“差は小さい”に入った者が、他の区分に納まった人よりも、自己受容は高いということになる。

表3は、3つの似より群と3つのズレの関係を、人数の出現で示したものである。似よりの3群間に差があるので、この表には出現率にな

おしたのも付記させた。人数をもとにして、 χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2 = 16.68$, $P < .01$ で有意な差が得られた。“大きな差あり”区分では、似より「小」群の方が「大」群に比べ、3.17倍となっているのに対し、“差は小さい”区分に入った者は、逆に、「大」群の方が「小」群に比べて1.73倍となった（いずれも出現率で比較）。全体と比較してみても、“大きな差あり”区分に入った者は、「小」群の多さ、「大」群の少なさが目立っているし、逆に、“差は小さい”区分で、「大」群の方が大きな出現をみせていることがわかる。似より「大」群の学生の方には、自己受容の高い者が多く、「小」群では自己受容の低い者が多いということが示唆されている。

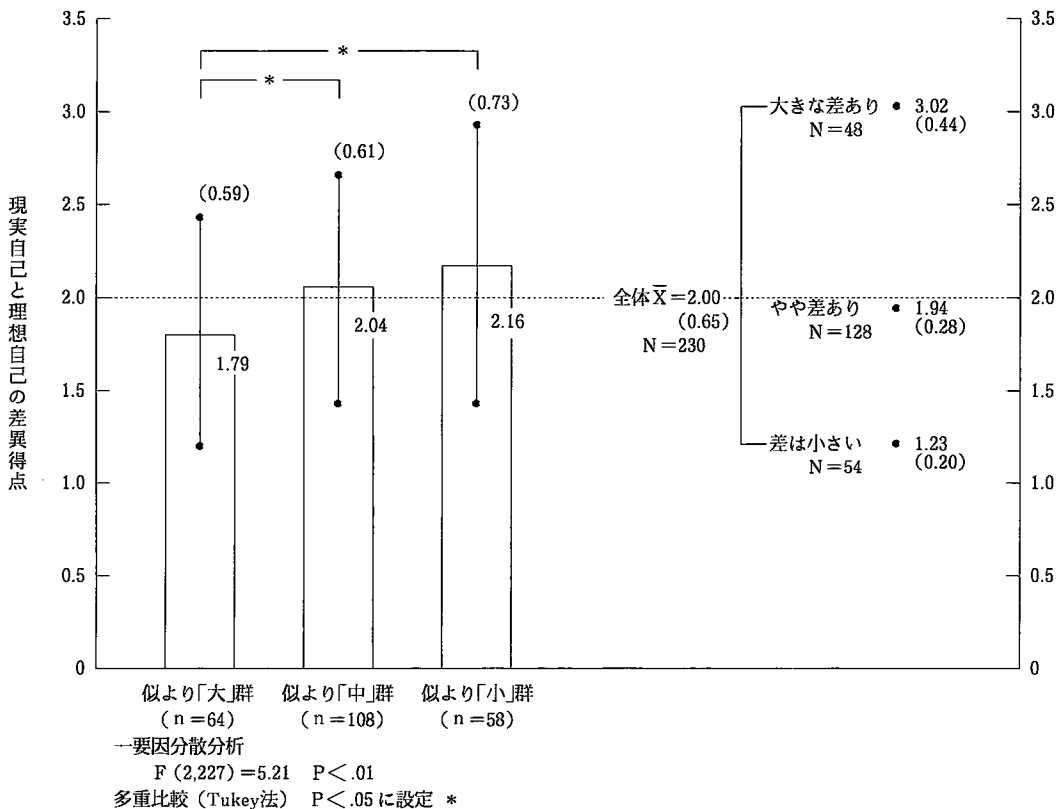


図2 似より3群の理想自己と現実自己の平均D-scoreとSD/3つのズレ区分のD-scoreの分布状況

表4 各因子ごとに抽出された3つのズレ区分と似より3群の関係

(単位 人数の出現率)

各因子ごとのD-score	似より「大」(n=64)			似より「中」(n=108)			似より「小」(n=58)			x ² 検定
	0.00 ~1.49	1.50 ~2.49	2.50 以上	0.00 ~1.49	1.50 ~2.49	2.50 以上	0.00 ~1.49	1.50 ~2.49	2.50 以上	
向性	67.2	31.3	1.6	56.5	35.2	8.3	50.0	39.7	10.3	(*)
強じん性	45.3	37.5	17.2	27.8	51.9	20.4	32.8	43.1	24.1	
誠実性	39.1	48.4	12.5	25.9	41.7	32.4	24.1	44.8	31.0	*
情緒安定性	35.9	42.2	21.9	25.0	45.4	29.6	22.4	36.2	41.4	
過敏性	48.4	32.8	18.8	38.0	33.3	28.7	29.3	27.6	43.1	*
理知性	50.0	35.9	14.1	39.8	37.0	23.1	37.9	32.8	29.3	
全体	35.9	53.1	10.9	17.6	63.0	19.4	20.7	44.8	34.5	

* P<.05 (*)「大」群と「小」群の比較で

図2の左側には、似より3群の理想自己と現実自己の平均差異得点とSDを図示している。同時に、右側には、3つのズレ区分の平均差異得点の分布状況を付図した。一要因分散分析の結果は、F(2,227)=5.21, P<.01と有意な差が出た。次に、3群を比較するための多重比較法としてTukey法を採用し、P<.05に設定して群間の有意差検定を試みた。「大」群の女子学生達は、他の2群の者達と比べ、理想の自分を現実の自分に近いところで捉えており、そのため、ズレの値(D-score)も有意に小さくなる事が分かった。

3. 6つの因子ごとにみた3群のD-score値について

各因子ごとに抽出された3つのズレ区分で見ると、似より3群の学生達はどのような理想自己と現実自己のズレを示すのであろうか。これを表にしたのが表4である。表は出現率で比較できるようにしてあるが、x²検定の際には人数に戻して処理をした。3群間の比較では、誠実性因子(x²=10.05, P<.05)と、過敏性因子(x²=9.52, P<.05)にのみ有意な差が得られた。「中」群をはずして、「大」群と「小」

群の比較でみた場合には、もう1つ、向性因子でx²=6.22, P<.05の有意差がでた。道徳性に関するもの、社会的成熟に関するものから成り立っている「誠実性因子」では、似より「中」・「小」群に“大きな差あり”の者が3分の1近くいるのに対し、「大」群では8分の1の者しか該当しない。「過敏性因子」は4項目しかないが、「大」群より「中」群、「中」群より「小」群となるにつれて、“大きな差あり”の人が増え、「小」群では4割強の者が、やや病的な感受性で大きなズレをみせている。「向性因子」においては、「大」群64名中1名(1.6%)、「小」

表5 6つの因子の中で2.50以上の大きなズレをみせた者の出現率

(単位 人の%)

群	大	中	小	計
いずれかの因子において2.50以上の差のあった者	40.6	60.1	63.7	55.7
6・5コの因子で	3.1	2.8	10.3	4.8
4・3コの因子で	10.9	22.2	20.7	18.7
2・1コの因子で	26.6	35.1	32.7	32.2
なし	59.4	39.9	36.3	44.3

大きな差あり vs 大きな差なし x²=8.31 P<.05

群58名中6名(10.3%)が“大きな差あり”に入っことを示しているが、小人数の中の注目すべき差なのかもしれない。

表5は、6つの因子の中で2.50以上の大きな差(ズレ)をみせた者が、3群の中でどの位いたかをみたものである。1つ以上は因子の中で2.50以上の差をみせた者と、すべてが2.50未満に納まった者との比較では3群間に有意な差が得られた($\chi^2=8.31, p<.05$)。ここでは、6つの因子の中で一つも大きな差をみせなかったのは、似より「大」群が一番多いことが分かる。2.50以上の大きなズレ(差)をみせた者につい

ても、3~6コの因子で大きな差をみせたのは、「大」群では14.0%に留まり、この数値は他の2群の25~31%、全体の23.5%に比しても、少ない出現であるといえよう。

4. 現実自己と理想自己の平均素点から似より「大」群と「小」群を見つめ直してみると

1980年の原データが行方不明のため、「大」群、「小」群とも全部のデータが揃わなかったことは誠に残念である。この分析に使用できたものは「大」群で81.3%の52名、「小」群では72.4%の42名分であった。ここで用いる差異

表6 現実自己と理想自己別にみた似より「大」群と「小」群の3つのズレ区分における平均素点とSD

ズレの区分 群		(単位 点)											
		差は小さい (0.82~1.49)			やや差あり (1.50~2.49)			大きな差あり (2.50~4.34)			全 体 (0.82~4.34)		
		「大」群	「小」群	t検定	「大」群	「小」群	t検定	「大」群	「小」群	t検定	「大」群	「小」群	t検定
因子	n	18	10	t検定	26	16	t検定	5	16	t検定	52	42	t検定
現 実 自 己	向 性	3.68 (0.85)	4.55 (0.66)		3.44 (0.62)	3.68 (0.84)		2.70 (1.04)	4.54 (0.95)	**	3.45 (0.80)	4.12 (0.93)	**
	強じん性※	3.38 (0.71)	3.73 (0.35)		3.48 (0.71)	3.93 (0.63)	*	4.02 (1.17)	4.81 (0.92)		3.50 (0.79)	4.22 (0.85)	**
	誠実性	2.71 (0.58)	3.55 (0.49)	**	3.16 (0.64)	3.57 (0.68)		4.56 (0.58)	3.94 (0.88)		3.14 (0.80)	3.70 (0.75)	**
	情緒安定性	2.83 (0.89)	4.05 (0.72)	**	3.50 (0.71)	3.94 (0.67)		4.22 (0.69)	4.41 (0.86)		3.34 (0.88)	4.15 (0.79)	**
	過敏性※	3.42 (0.85)	4.22 (0.57)	*	3.51 (1.25)	4.08 (0.94)		2.96 (0.82)	4.34 (0.83)	**	3.43 (1.11)	4.21 (0.83)	**
	理知性	3.93 (0.53)	4.36 (0.50)	*	4.07 (0.86)	4.07 (0.66)		5.60 (0.72)	4.60 (0.72)	*	4.17 (0.89)	4.34 (0.69)	
理 想 自 己	向 性	3.22 (0.54)	3.54 (0.41)		3.14 (0.52)	3.19 (0.63)		2.48 (0.78)	3.25 (0.60)	*	3.11 (0.59)	3.30 (0.59)	
	強じん性※	2.53 (0.62)	3.09 (0.41)	*	2.06 (0.46)	2.63 (0.55)	**	1.70 (0.32)	2.12 (0.59)		2.19 (0.58)	2.55 (0.66)	**
	誠実性	2.01 (0.61)	3.08 (0.55)	**	1.68 (0.44)	2.03 (0.57)	*	1.62 (0.53)	1.58 (0.52)		1.79 (0.54)	2.11 (0.79)	*
	情緒安定性	2.12 (0.73)	3.11 (0.65)	**	1.76 (0.68)	2.22 (0.49)	*	1.28 (0.23)	1.44 (0.50)		1.84 (0.71)	2.13 (0.84)	
	過敏性※	3.07 (0.54)	3.69 (0.34)	**	2.90 (0.44)	3.14 (0.52)		2.48 (0.82)	2.76 (0.63)		2.92 (0.55)	3.13 (0.64)	
	理知性	3.70 (0.55)	3.66 (0.35)		3.03 (0.78)	3.06 (0.85)		2.84 (0.46)	2.44 (1.05)		3.24 (0.76)	2.97 (0.97)	

** p<.01

* p<.05

※(8-Xi)変換

(ズレ) 区分は、もとに戻し、全体より取り出した3つの区分である。各因子ごとに、現実自己と理想自己のそれぞれの平均素点とSDを計算し、現実の自分をどの位好意的にみているのか調べてみる。また、こうありたいと思う理想の自己では、現実の自己と比べて、どの程度どれ位どの方向にズレて評定されているかを捉えようとするものである(表6)。

長島ら(1967)¹⁰⁾のSelf-differential法での並べ方は、評定時の単調さ・前後の影響を防ぐために、強じん性因子と過敏性因子の形容詞対の好悪関係を逆転させている。しかし、表6では、数値をみていく上で混乱しないように、この2つの因子については(8-Xi)変換をし、他の4つの因子と同じ素点になるようにした。よって、得点の値は1.00~7.00の間に分布することになるが、得点の値が低くなるほど、各因子の好ましさが増すと考えてよい。「向性因子」では、得点が低くなるほど外向性を示す。「強じん性因子」では、強じて意欲的な側面がアップする。「誠実性因子」では、先にも触れたように、道徳性・社会的成熟性が高まっていく。「情緒安定性因子」では、低得点になるほど、ポジティブな情動の存在がうかがわれ、より情緒は安定しているとみなされる。「過敏性因子」では、感受性に関する病的な受け止め方が弱まっていく。最後の「理知性因子」では、理性的、冷静な対処ができると判断していることになる。

現実自己について、全体の結果をみてみると、理知性を除いた5つの因子において、2群間に有意な差が出た。「大」群の方が、明らかに「小」群の者よりも、自分のことを好ましく受け止めているということである。次に、3つのズレ区分別にみていくと、「差は小さい」区分では、4つの因子について2群間に差があった。

平均素点でみると、この区分の者に明瞭な差が認められているのである。しかし、現実自己と理想自己とのズレは一番少ない区分なのである。

“やや差あり”区分に納まっている者では、強じん性にのみ差が出ているが、2群間の認知差は無くなっていく。さて、“大きな差あり”区分であるが、似より「大」群はわずかの5名である。これで2群間を比較するのは少々難しいことで、ここは参考程度にみてほしい。「大」群の5名は、「小」群の16名に比べて、より外向的であり、より健全な感受性をもっていることが分かる。しかし、理知性因子については逆転し、自分が理知的でないという思いは強いようである。

次に、理想自己についてみてみよう。全体で2群を比較した場合、現実自己とはかわって、強じん性と誠実性にしか有意差はでなかった。大体において、同じような理想自己をイメージしていることになる。しかし、3つのズレ区分別にみてみると、その状況はかなり変化する。ここでも、“差は小さい”区分に入った者達に大きな差が生じている。「小」群の者より「大」群の学生の方が、より高い理想へ自己のイメージを振り向けているのである。やはり前と同じ注意がいるのだが、現実の自分と理想の自分にそれほど大きなズレを感じていない集団の学生達であるということである。「大」群の者は、もともと自分を好ましい方に認知しているので、理想自己のイメージも、さらに好ましく考えたとしても、そのズレはさほど大きくは変化しないのである。同様のことは「小」群の学生達にもいえることで、理想自己を「大」群と同じところまでもっていつているわけではなく、より現実の自分に近いところで、彼女らなりのイメージをえがくので、そのズレはやはり小さいものとなっている(表7も参照するとよい)。

表7 現実自己と理想自己の平均素点をもとにしたズレの程度について

(単位 点)

因子	ズレの区分		群		n		差は小さい		やや差あり		大きな差あり		全 体		
	「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		「大」群 「小」群		
	18	10	t検定	26	16	t検定	5	16	t検定	52	42	t検定			t検定
向 性	0.63 (0.43)	0.61 (0.46)		0.62 (0.44)	0.96 (0.66)		0.54 (0.65)	1.51 (0.72)	*	0.62 (0.46)	1.09 (0.74)	**			
強 じ ん 性	0.91 (0.48)	0.74 (0.46)		1.43 (0.63)	1.30 (0.65)		2.44 (1.14)	2.75 (0.98)		1.35 (0.78)	1.72 (1.13)				
誠 実 性	0.77 (0.43)	0.67 (0.34)		1.49 (0.53)	1.53 (0.69)		2.94 (0.34)	2.36 (0.95)		1.38 (0.78)	1.64 (0.99)				
情 緒 安 定 性	0.71 (0.45)	0.94 (0.42)		1.74 (0.60)	1.73 (0.69)		2.94 (0.75)	2.98 (0.73)		1.50 (0.88)	2.02 (1.04)	*			
過 敏 性	0.63 (0.47)	0.73 (0.40)		0.93 (0.94)	1.14 (0.82)		0.60 (0.24)	1.58 (0.89)	*	0.79 (0.77)	1.21 (0.84)	*			
理 知 性	0.50 (0.45)	0.74 (0.54)		1.21 (0.71)	1.08 (0.66)		2.76 (0.50)	2.16 (1.22)		1.11 (0.88)	1.41 (1.08)				

** p < .01

* p < .05

ところが、“やや差あり”とか“大きな差あり”の中に位置づけられた者は、現実と理想の自己の認知には大きな開きをみせてくる。ズレが大きくなるにつれて群間には差がみられなくなっている。お互いが、大きく理想の自己のイメージを、好ましい方向へぐんと押し出している。表7は、3つの区分と全体における2群間のズレの程度を、平均素点の差で示したものである。全体でみると、向性・情緒安定性・過敏性で2群間は差をみせている。こうありがたい理想自己と、現実の自己との認知差は、「小」群の方が大きいという結果である。今の自己を変えてみたいという思いの差なのだろうか。3つのズレの区分別で2群の比較をしてみると、“大きな差あり”区分において、向性と過敏性にズレの程度差がでた。（「小」群の方が、より大きく自分を変えたいと思っていることになる。）ところが、“差は小さい”・“やや差あり”では、

まったくズレに有意な差はなく、現実自己と理想自己のズレを2群のものはほぼ同じ位にずらしたということがわかった。これを解釈すれば、より現実の自分に近いところで、それなりにズラせながら、理想とする自分のイメージを思いえがいたということである。似より「大」群の学生はその群らしく、「小」群の者は、好ましい自分を、「大」群よりは少し低いところで、この群の者らしく、そのズレの程度を上げていったのである。青年後期にいる似より「小」群の女子学生の中には、まだ自分をとりまいて、自分とは違った自己認知をしている他者を、自分の心の中に受け入れるまでには至っていない者もいる、ということを示唆しているように思うのである。

この論文を作成するにあたって、精読した研

究者の論文は、山本¹⁸⁾⁻²¹⁾、伊藤⁹⁾⁻¹⁰⁾、遠藤⁶⁾、村田¹⁴⁾の研究論文と、中村・板津¹⁶⁾の自己受容性に関する文献研究であった。

山本は、現実自己と理想自己のズレの程度を個人的適応の指標として、対人認知の中に位置づけながら、多変量解析の手法をもちいて精力的な研究を続けている。何らかの意味でかわりのある他者がわれわれをみる「自己」の像と、そうした他者との関係にあってわれわれが抱く多面的な「自己」像との関連を吟味している。自己認知にしか目がいっていなかった筆者にとって、社会心理学的接近である、対人認知の側面から自己概念ないしは自己受容について研究を進めるというのは、これからのテーマとして魅力的である。

伊藤の研究の面白いところは、対人認知の研究において、社会的好感度 (social good-bad) と知的評価 (intellectual good-bad) の2次元で解釈がなされることに注目し、自己認知の研究に応用した点である。自己認知の研究においても、評価的 (尊敬) 次元と感覚的 (好感) 次元という2つの次元から検討することの意義を見出している。彼女は、林 (1978) のアプローチをベースにして、Berger (1952) の「自己受容と他者受容には正の相関関係がある」という指摘に目を留め、自己と他者に対しては共通の認知次元が存在すると考えた。「良い-悪い」(評価次元) と「好き-嫌い」(感覚次元) の2つの側面から、自己認知について発達的研究を展開し、一定の成果を修めつつある。

遠藤は、自分をポジティブな存在であると思う「自尊感情 (self-esteem)」について、これには2つの意味、「これでよい」という意味の自尊感情と、「とてもよい」という意味での自尊感情があることに着目した。なかでも、「これでよい」という意味での自尊感情には、優越

性や完全性は含まれていない (Rosenberg, 1986) という考え方を採用し、被験者それぞれの個人にとって、重要な視点を研究に組み込んだMorettiら (1990) のやり方に彼女独特の「かくありたくない」という負の理想自己の存在を絡ませた。「かくありたい」という正の理想自己に比べ、特に日本人は、「かくありたくない人間にいかになっていないかということが、自尊感情を強く支えている」とみて、2つの作業仮説を立てた。

1. 個人にとって重要な項目における正の理想自己と現実自己の差異スコアは、自尊感情得点と強い負の相関関係にあるが、個人にとって重要でない項目においては相関関係は弱い。
2. 個人にとって重要な項目における負の理想自己と現実自己の差異スコアは、自尊感情と強い正の相関関係にあるが、個人にとって重要でない項目については相関関係は弱い。

この2つの仮説通りの見事な証明をしてみせた。さらに、個人にとって重要な項目については、負の理想自己の方が、正の理想自己よりも高い自己評価をみせた、ということを大学生を対象にして明らかにした。また、彼女の記述の中から、近年、主として社会認知心理学の領域では、主体的人間観を基盤に、人間の自己形成的側面を個人の目標や関心に焦点をあてて、解明していこうとする機運が高まっていることを初めて知った。発達心理学的研究や人格心理学的研究にプラスして、この方面からの追究も始まりだしたということは、さらなる研究の飛躍・実りが期待されるのである。

中村・板津が、Rogersのクライアント中心療法からの流れである自己受容を、Therapeutic Goalというよりも、一次的なパーソナリティ

の変化、パーソナリティ成長の始まりであると受け止めていることは、「はじめに」の4-1. 自己受容とは(定義)のところでも述べたことである。このことに加えて、彼らは更にセラピスト・相談者の問題についても触れている。相談者の資質条件として、その人格特性をあげるならば、人間的な暖かみをもち、自己受容ができている人(江川, 1986)でなければならないと指摘している。「セラピストが自己を受容できないでいるならば、自分自身の偏見と感情によって自己が歪められ、事態をしっかりと認識することはできない。“満ちたりた落ち着き”をもたない人には、クライアントの問題、クライアント自身をあるがままに受け入れることなど困難である。自分自身を受け入れられないならば、他者を受け入れるということはできない。他者受容するには、自己受容していることが前提であることを知らねばならない(P. 148より)。」と結んでいる。

ここまで論を進めたら、毎年青年心理学で講義している、Jersild, A. T. (1957)¹⁰⁾の言葉が甦ってきた。「自我の成熟にとって自己受容が重要な意味をもつ。自己受容とは、①自分に対する肯定的態度、②ありのままの自己を認め受け入れることである。他者に受容されることによって、初めて自己受容が可能になり、また、自己受容があってこそ、他者を真に受容することができる。」というものである。

次に思い浮かんだ人は、1992年の紀要論文⁵⁾でまとめ上げることでできた、西平(1986)¹¹⁾の<私>と内なる他者の考えである。本論文ではもう少し整理して、次の7つに絞って紹介を試みることにする。

1) <私>は実体ではない。<私>は他者なしには存在しない。

- 2) <私>とは、<内なる他者>との関係である。
- 3) <私>の存在構造を、<私は実体である>という理解とは対比的に、<私それ自身が関係である>と表現したい。
- 4) <私>は、<関係において>と同時に、<プロセスとして>理解されるのである。
- 5) <私>は、常に可能性として存在しているのである。
- 6) <私>の在り方は、<私>それ自身の中にすき間があり、ズレがあるのでなくてはならない。
- 7) <私>とは、まさに<私>の内に不断に差異を産み出しつづけ、またそれを乗り越えようと、新しい<私>に投企しつづけるプロセスなのである。

とうとう、49歳の私も、この考え方が分かるようになってきた。これが私にとって早いことなのか遅いものなのか、自分ではまだ判断がつかない。「自分とは一体何者なのか」の原点である、5・6歳頃に涙した「死について」の考えからみれば、随分と私は私なりに自分を理解できるようになってきている。これは実感である。しかしである。やはり、未来における自分が今のままの状態なのか、それとも変化しつづけていくものなのかどうかについては、依然として知識のみで、知恵的には暗闇の中に存在している。これからも自分らしく、どう生き切っていくのだろうか。軽い不安と大きな希望の中に今は立っている。

本研究では、自己受容について、親子の似よりで分けた3群との関係で、自分なりの分析を試みてみた。調査に協力してくれた女子学生達が、この後どのように自分の人生を、自分らし

く生きていくのであろうか。3群のそれぞれに違ったやり方が待っていることだろう。理想と現実のズレの大きい若者は、足を浮かせ、今の自分を忘れ精神的に焦ることのないように、己の理想へ向けて着実な一步一步を歩みつけてほしい。現実の自分にかなり満足している学生も、あまり現実主義的に世の中のことを割り切らず、少々ロマンチックに自己を受け止めなおしてみても、と助言してみたい。私は今、エンデの「モモ」・「はてしない物語」やサン＝テグジュペリの「星の王子さま」が大好きになっている。ファンタジーの世界の素晴らしさは、心の潤いでもあり、心のエネルギー源でもある。この空想の世界を、今の若者はもっともっと求めつけてほしいと真剣に思うようになってきた。

小学校の教員として活躍している卒業生会員をお願いしたいことがある。これから多感な青年期に立ち向かっていかなければならない子ども達（児童）の心のなかに、大きな夢の種、未来への希望の種をうえつけてやってほしい。そのためには、先生も地にしっかりと足をつけ、地道な毎日の努力のなかで、子ども一人ひとりの個性を確かめ、その子にあった理想の自己へと目を向けさせる切っ掛けを与えることのできる人になりつつけてほしい。これは、私が青年心理学の第1回目と最終回の講義で学生達に投げかける、「看脚下」の精神なのである。一粒のまかれた種から、可能性の芽が出、成長し、そして自己受容という花が咲く。これは、次の世代への種として実りをもたらす。私の半生がそうであったように、人生指導を率先し、わが身を子ども達の前にさらけ出すことによって、「共育」しあってほしいと思うのである。先生が尊敬できる人間に育った自分の幸

せを思うからである。

1992年（平成4年）11月20日満91歳の誕生日を迎えられた、武田ミキ学長の一日も早い現役復帰を祈りつつ筆を置く。

文 献

- 1) 秋山幹男 1981 「父-母-娘」三者間の認知について(1) ——学生（娘）からみた2種の認知タイプの比較と自己把握度——日本心理学会第45回大会発表論文集 500
- 2) 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について(3) ——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72
- 3) 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について(6) ——三者間の似よりと自己把握度—— 日本心理学会第52回大会発表論文集 31
- 4) 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について(5) ——三者間の似よりもとづく分析—— 広島文教女子大学紀要（人文・社会科学編）23 83-102
- 5) 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 6) 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係——重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—— 教心研 40 157-163
- 7) 池見西次郎 1968 自己分析 講談社
- 8) 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達の变化——2次元から見た自己受容発達プロセス 発達心理学研

- 究2 70-77
- 9) 伊藤美奈子 1992a 自己受容を規定する理想-現実の差異と自意識についての研究 教心研 40 164-169
- 10) 伊藤美奈子 1992b 自己受容と性格特性との関連についての一考察 心研 63 205-208
- 11) Jersild, A.T. 1957 The Psychology of Adolescence New York : Macmillan Company (東京都私立短期大学協会編 1972 青年心理学 酒井書店・育英堂 P.48より)
- 12) 三木善彦 1976 内観療法入門 創元社
- 13) 森田正馬・水谷啓二 1959 自覚と悟りへの道 白揚社
- 14) 村田義幸・窪田龍記 1984 大学生の自己概念と適応 長崎大学教育学部教育科学研究報告 31 57-65
- 15) 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2) — Self-differential の作製 東京教育大学教育学部紀要 13 59-83
- 16) 中村昭之・板津裕己 1988 自己受容性の研究 —文献的研究と文献目録 駒沢社会学研究 20 131-171
- 17) 西平 直 1986 <私>をどう理解するか —H. ワロンの<内なる他者>を手掛りに 東京大学教育学部紀要 26 197-205
- 18) 山本都久 1985 自己概念に関する多変量解析 富山大学教育学部紀要(A文科系) 33 57-68
- 19) 山本都久 1986 多面的な自己像の多変量解析 富山大学教育学部紀要(A文科系) 34 39-47
- 20) 山本都久 1987 現実自己と理想自己のズレとCASテストの関係 富山大学教育学部紀要(A文科系) 35 37-43
- 21) 山本都久 1988 いろいろな自己像の間のズレとINVテストの関係 富山大学教育学部紀要(A文科系) 36 43-52